

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:82.

化学療法の副作用のために治療計画の変更を余儀なくされた 大腸がん患者の心理過程と意思決定支援

上西 のどか, 本間 理紗, 松下 莉子

化学療法の副作用のために治療計画の変更を余儀なくされた 大腸がん患者の心理過程と意思決定支援

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション ○上西のどか 本間理紗 松下莉子

【目的】

本研究は、化学療法の副作用のために治療計画の変更を余儀なくされた患者の心理過程を明らかにし、その際の看護師の関わりを振り返ることで、不安を軽減し新たな治療に向かっていく過程を支えるための看護介入を検討する。

【方法】

対象は大腸がん(StageⅣ)に対し2年半以上化学療法を継続している中で、副作用症状の増悪があり治療変更することを意思決定した60歳代女性。質的記述的研究を用い、患者の看護記録、診察記事、部門記録よりデータを抽出した。

【結果】

全71個のコードを分析し、32個のサブカテゴリーが抽出された。

A氏は長期間の治療に対する漠然とした不安を抱いていたが<看護師に話すことで安心する>ことができ、<終わりのない治療に対する戸惑い>を整理していた。

副作用症状の増悪によりオキサリプラチンを休薬した際には、<病状の進行を危惧>しながらも、治療計画の変更を打診され<踏ん切りがつかない>状態であったが、医療者と話し合う機会を設け、<新しい治療にすることで得られる日常生活に目を向ける>ことができ、治療計画の変更を自己決定した。

治療計画変更後は、これまでの治療を振り返り<副作用症状の持続が新たな治療に目を向けるきっかけになった>。また、<長い治療を経て人生を楽しみたいと考える>ようになり、<治療変更したことを肯定的に捉える>ことができていた。

【考察】

A氏の思いを表出する場を継続的に設けることで、看護師との信頼関係が構築されていた。治療計画変更を決めかねていたが、医療者から情報を得て治療計画変更後の生活を具体的に想像でき、新たな治療に対する不安の軽減に繋がった。A氏は長い治療経過の中でがんサバイバーとしての自分を受け止め、がんとともに生きる覚悟ができたことが強みであったと考える。揺れ動く思いを抱える患者の心理に看護師が目を向け、思いを表出する場の設定や情報提供を行うことが有用な意思決定支援となっていた。